

## 北総の詩人伊藤和はいかにして一揆の鐘を響かせたか

村田裕和

はじめに

九十九里浜に面して無数に点在する村々。その一つ、千葉県匝瑳郡栄村（現匝瑳市）に伊藤和（一九〇四年～一九六五年）は生まれた。家は自作兼小作農であった。農業のかたわら、アナキズムの立場に立って農民運動にも携わったひとりの「百姓」は、同時に、北総の大地に鎌を打ち振るようにして詩を作った詩人でもあった。

とりわけ、銚子町に隣接する高神村の農漁民蜂起を歌った「高神村事件のときの詩」（『馬』第四号、一九三〇年十月）が代表作とされている。掲載誌の『馬』は、伊藤和ら北総の先鋭的な農民詩人によるガリ版雑誌であったが、高神村の村民を全面的に支持する詩やルポルタージュを掲載したために、同人の伊藤和と田村栄は起訴され有罪となっている（『馬』事件）。農民としての労働と生活と運動。そして詩人としての自己の立場。伊藤和は、これらを「アナキズム」によって結び付け、表現した詩人であった。

松永伍一は『日本農民詩史』中巻一（法政大学出版局、一九六八年）のなかで、「もつとも戦闘的アナキストの一人である伊藤和は、『馬』事件に象徴される行為の質によって、われわれの記憶のうちに消し去ることのできない農民詩人として、今日たくましく佇立している」（二六二頁）と述べ、「戦闘的アナキストの一人」であり「農民詩人」でもある伊藤を高

く評価していた。

アナキズム文学・文化運動について多くの著作を残した秋山清も、『伊藤和詩集』（国文社、一九六〇年）の解説のなかで、「リアリズムということを、アナキストの詩人たちは昭和六、七ごろ積極的に考えていたが、それを農民生活のなかで「リアリズムとは生活ということだ」というような思考の最短距離で伊藤は自分のものとしていた」と、生活に根ざした詩のスタイルを評価している。また、戦前のアナキズム詩人岡本潤も、伊藤の詩からは「ブリューゲルの絵が連想される」としたうえで、「訥弁のかれは、訥弁そのものが重層的なリズムとして詩の中に活かされていたともいえる」とその独自のリズムに注目していた。

観念的ではなく、地に足つけた日々の生活の中からつかみ出された平易なことばで現実を歌い、闘いの意志を表明し、しかもそれが「独自のリズム」に達していた農民詩人・アナキズム詩人であったということが出来るだろう。

だが一方で、その評価は、「高神村事件のときの詩」など一九三〇年代前半の「アナキズム詩」の時代に限定されており、その前後の作品は十分な検討を経ないままにとどまっている。とりわけ、漠然と存在が知られていただけの初期の作品は、これまで積極的に発掘されてこず、詩の手法やモチーフの変容についての検討は十分とはいえない。

北総地帯の農村運動に詳しい渡辺新も、一九三〇年代の伊藤和の詩を、

「農民運動を続けながら自らの思想を練り上げ、その自覚を得た生活のなかから掴み取ったもの、あるいは昭和恐慌下農村の困窮と農民の反発的日常生活を描いたものが多かった」と的確に指摘しているものの、初期の作品に関しては、秋山や松永の評価をふまえた上で、「自然のなかにある青春の賛美をテーマとする抒情詩であり、また極めて小心で善良な自作農の農本主義的な意識をでない」と概括するにとどまっていた。

本稿では、北総の農村地帯に「百姓詩人」として生きた伊藤和の初期詩編からアナキズム詩への変化について考察し、その変化の過程に「高神村事件のときの詩」を位置づけたい。

\*

ここでは伊藤和の詩業を、大きく三つの時期に区分しておく。

現在確認しうるもつとも早い時期の詩は一九二四年の発表である。それから一九二九年前半頃までを「初期詩編」の時代（第一期）とする。伊藤和の詩業を集大成した『伊藤和詩集』（一九六〇年）には、この時期の作品は一編も採録されていない。

生前に親交のあった寺島珠雄によれば、内野健児の妻後藤郁子が発行人となって京城で創刊された雑誌『鋌』の創刊号（一九二八年一月）に、伊藤和の詩集『黒い魂』（五體社）の受贈記録があるというが、これは現在まで幻の詩集となっている。

次が、同人雑誌『馬』（馬社、一九二九年～一九三二年、全八冊）<sup>⑥</sup>の創刊と、個人詩集『泥』（下口社、一九三〇年）の刊行から一九三五年の検挙までの「アナキズム詩」の時代（第二期）である。

『伊藤和詩集』は三部立て——内訳は「泥」（二十七編）、「米を売る話」（十五編）、「産業路」（十四編）——になっているが、このうち「泥」が詩集『泥』を再録したものと考えられ、これにつづいて諸雑誌に発表された詩が、「米を売る話」に収められている。つまり、同詩集の四分の三の

作品は、この第二期の詩で占められているのである。

初出誌は、『馬』のほか、萩原恭次郎が前橋で発行したガリ版雑誌『クロボトキンを中心にした芸術の研究』や、局清（秋山清）と小野十三郎が中心のアナキズム詩雑誌『弾道』（第二次）、アナキズム作家・詩人らの統一をめざした「解放文化聯盟」の機関誌でタブロイド判の『文学通信』など、いずれもアナキズム系の文芸誌であるが、現物を確認できないものが多数含まれている。

伊藤は一九三五年十一月に無政府共産党事件による検挙で東京砂町署に六ヶ月留置され、翌三六年七月には農村青年社事件で千葉県八日市場署に検挙された。マルクス主義系文化団体への弾圧が一通りおこなわれたあとで、アナキズム系諸団体が標的とされていったのである。その後、約十年間、伊藤は詩筆を絶ち、詩も私的な感想の類も残さなかったとみられる。

最後が、一九四五年度の敗戦から亡くなるまで（実質的には一九五〇年までの）「戦後詩」の時代（第三期）である。この時期、岡本潤と前後して共産党に入り、新日本文学会の常任中央委員にも就いたが、作品は少なく、秋山清によって、「回復しない点もあり」、「戦前よりポリウムを減少了」と評されている<sup>⑦</sup>。

前出の『伊藤和詩集』では「産業路」の十四編が第三期の作品である。これらは秋山清らの『コスモス』（第一次、コスモス書店、一九四六年四月～一九四八年十月、全十二冊）や、千葉県地方詩誌『詩精神』（千葉詩人会、一九四七年一月～一九四九年九月、全八冊。終刊時不明）に掲載されたものである。分量としては少ないものの、「戦後」の農村の現実と伊藤和がどのように格闘していたのか、今後詳細に検証する必要がある。なおGHQに大幅な検閲削除を受け、結果的に不掲載となった作品に「B29の大音」がある<sup>⑧</sup>。

## 一 日照り

『伊藤和詩集』巻末の「略年譜」によれば、伊藤は、小学校を卒業してから、数え年十六歳で上京してさまざまな労働に従事し、再び村に戻り、一九二一（大正十）年、十八歳で結婚。翌年には長男が生まれている。詩を書き始めたのは、その頃からであった。寺島珠雄の言葉によれば、「子持ちの文学青年（兼思想青年）」として出発したのである。

つづけて「略年譜」には、内野健児が一九二二年一月に朝鮮で創刊した雑誌『耕人』に、一九二四年頃から投稿しているとあって、日本近代文学館所蔵の原本によって確認すると、合計十四タイトルの詩と十五首の短歌が判明した。最初は一九二四年八月号（第三巻第八号）の「夏の夜窓べに寄りて」と「無題」で、以下『耕人』掲載の詩や短歌が、現在確認できる最初期の作品である。

詩「夏の夜窓べに寄りて」は、夜の草木や月光からあふれる生氣に、美神の訪れを読み取り、「若々しい自然の花だ／女神に抱かれた詩人の夢だ」と陶醉する。その様子は観念的であり、「ホイットマン」が持ち出されているところにも明らかのように田園詩・民衆詩の模倣の域を出ない。翌九月の『耕人』に掲載された「百姓の嘆」には、早くも伊藤和の生涯のテーマが出現している。ここでは、「照り続くお天気は／七月の黄塵にあほられて／赤い赤い焰とかはつて行き」という過酷な日照りに苦しむ「百姓達」が歌われている。彼らは「大きな嘆」のなかで、空を見上げ「黙然として祈る」しかない。

カンカンと鐘が鳴る

おお夫れは 百姓の老人達が

お大師さまの、ごりやく、ごりやくにおすがりして

祈念をこむる鐘の響だ!!（\*傍点原文）

北総の詩人伊藤和はいかにして一揆の鐘を響かせたか

何百年と繰り返されてきたであろう「百姓」たちの祈り。炎天にひびく乾いた鐘の音は、現実から切り取られただけのありふれた言葉でありながら、力強いリズムを詩に与えている。伊藤和の詩言語の最大の特徴は、まるで今掘り出されたばかりの作物のように、土のおいさえ漂うこうした言葉が一見無造作に投げ出され、しかし、それらが互いに交響しあい重層的に全体のイメージを構築するところにあった。

詩集『泥』（一九三〇年）所収の詩「天の災」は、この「百姓の嘆」を五年ぶりに改作したものである。日照りの描写など、ほとんど同じ詩句で歌い出され、老人たちの祈りの鐘の音まで来たところで、詩人は、「祈るよまい言を止め／土を嚙つても生きねばならない」と激し、さらに、米の蓄えさえないことに触れた上で、「あのまっ赤な夕焼／おらたちの血／雨祈りの鐘が一揆の鐘になれ!」と叫ぶ。祈禱の無力さを自覚し、日照りそのものが「嘆き」の真の原因ではないという認識が、ここには明確に表れている。

同じく、詩集『泥』にある詩「老ぼれめ」でも、牛馬のように労働しながら、「それでもまたあいつらと仲よしになりたい幻影が消えない」<sup>①</sup>老人たちへの厳しい言葉が並んでいる。

村の老人たちへの強い批判は、究極的には「父」との相克となって現れる。詩「逆流」（『クロポトキンを中心にした芸術の研究』第三号、一九三二年十月）に、「父は侮蔑をうける小作人。／おれは父のなかに千万の奴隷を感じそいつを憎み、苦しみ、怒声を放つて父と争い猛然とした」とあるのがそれである。一九二四年頃の初期詩編から「アナキズム詩」への急激な変化は、まず第一に農村における前世代およびその習俗、あるいは「百姓」の美德とさえいわれる忍耐強さとの訣別として表されたのである。



## 二 夜業

出発期の伊藤がおもな発表舞台とした『耕人』が一九二五年十二月に終刊すると、次に投稿先とされたのが詩雑誌『詩神』であった。一九二六年一月号にはじめて投稿作品が掲載された際には、伊藤の詩「やるせない明暗」と並んで鈴木勝の「仕事」「秋の庭」という詩が掲載されている。鈴木勝は千葉県山武郡豊成村（現東金市）の出身で、伊藤と同じ北総・九十九里地域の詩人・農民運動家の一人であり、一九二九年に創立された千葉詩人会には伊藤とともに参加、『馬』を協同して創刊している。『詩神』をはじめとする当時の詩雑誌の投稿欄には、こうした農民運動にも積極的な若い「無名」詩人たちが数多く詩を寄せていたことと考えられる。

福田正夫が顧問となつて一九二五年に創刊された『詩神』は、当初「民衆詩派」の色彩をみせていたが、しだいに、アナキズム詩やモダニズム詩などの尖端的詩人を積極的に取り込んで、有力詩誌の一つとなった。伊藤は、一九二六年一月号から一九二九年一月号にかけて二十編以上の詩をここに発表した。同時期には、『文芸戦線』と『太平洋詩人』にも二編ずつ掲載されている。

すでにいくつか確認したように、初期の詩では自然風景を素材に歌い、そこに寂寥や悲哀などの感情を織り込んで歌ったものが多く、一種の抒情的田園詩あるいは「民衆詩派」に近いスタイルから出発している。詩「めぐまれた十月」（『耕人』一九二五年二月）の、「お、ひろびろ鋤きかへされた耕作地／そこに蒔きつけられる私等の種子よ」といった詩句の明朗さは、民衆詩派が持つ労働賛歌と労働哀歌の二つの側面の前者に通じている。

しかし、どこかこの詩には、仮構された理想郷が現実の上に二重写し

されているような、いいかえれば、このつかの間の牧歌的光景が今にも失われかねないような危うささえ感じられる。それは、「いく世紀 かはらない労働を続け」と書かれる「百姓」労働の永遠性に、いささかの陰影も見られないところから来ているだろう。

この詩は、一九二五年四月号の『耕人』に載った同人評で、「詩は文字で示さずとも、吾々の口音に依つても表現出来るのである。（中略）この作者にはペンを持つて後の苦心よりも、真理をつかむことに努力を切望する」（廣岡南夢「耕人二月号詩壇評」と指摘される。これも一つのきつかけとなったのか、これ以後、こうした明朗率直な賛歌は歌われなくなる。たとえば一九二六年三月号の『詩神』に載った「秋は終りだ」は、梢の「小雀」に向かつて、「もはや地の底には／苛酷な冬の魔がひそんでい」と言い、「せめて苦しいかなしみの挽歌を唄はぬか」と語りかける。抽象的ではあるがその後の苦難を予言する詩である。

こうした時期に『文芸戦線』に掲載された「夜業」（三巻二号、一九二六年二月）と、「吾子」（三巻六号、一九二六年六月）という二つの詩は、いずれも夜業に励む貧しい夫婦が感傷的に歌われていて、労働哀歌と呼ぶにふさわしい。後者の詩ではせがむ息子に「赤いしやつぽ」を買ってやれない父の悲哀が柔らかく捉えられている。『文芸戦線』に投稿していることから、すでに社会への批判的な意識が伊藤の中にきざしていたことは確かだと思われるが、それらはまだ抒情的・感傷的な表現の枠を越えるものではなかった。

ただし、この二編が、プロレタリア文学者の統一戦線を目的として一九二五年十二月に創立された日本プロレタリア文芸聯盟の時代と重なっている点には注意を払っておかねばならない。『文芸戦線』がその機関誌的位置づけとなって、誌上に萩原恭次郎・岡本潤・小野十三郎といったアナキズム系の詩人たちが登場するのは、一九二六年に限ったこと

だった。伊藤は、まだ彼らと接触を持っていなかったと考えられるが、農民詩人として、より多くアナキズムに惹かれる何かを見いだしていたものと思われる。

それを傍証するように、一九二六年十一月十四日に文芸聯盟が日本プロレタリア芸術聯盟（プロ芸）へと改組されてアナキズム系の詩人たちが「排除」された直後、伊藤もまた、アナキズム系詩人たちが多く作品を発表していた『太平洋詩人』に詩を寄せていたのである。

思想的な分化を経していない「自然生長」的な作家・詩人・一般投稿者たちにとって、文芸聯盟改組（実質的には『文芸戦線』の改組）は、自己のイデオロギー的立場への自覚を強く促したことだろう。アナキズム系の詩人たちは、この出来事によってようやくみずからの統一の機関を持つ必要にせまられ、一九二七年一月に文芸解放社を設立し、『文芸解放』を創刊するに至る<sup>⑧</sup>。伊藤和にとっても、この出来事は、自己の立場を闡明するための避けがたい契機だったにちがいない。

### 三 出奔

素朴な風景詩・心情詩から出発した伊藤和の詩は、のちの「アナキズム詩」にいたっても、その誠実・木訥な人柄とともに素朴な詩風が土台にあることに変わりはなかった。しかし、その道筋は、それほど真つ直ぐなものではなく、丹念に見ていくと、初期の詩編でも、さまざまなスタイルが試みられていたことがわかる。

たとえば、『詩神』第二巻第一号（一九二六年一月）の「やるせない明暗」——同誌に掲載された最初の作品——には「そつと眸を伏せたころの中に／いらいらと落ちつかぬ聴神経の反撥！／——午后三時の柱時計は／べつとりと幻に吸いつけられて／ゆるむたゼンマイはみにく

く響く——」とあった。ここでは、「こひつと」を想う「ぼく」の悩ましが、弛緩しゆがんだ時間を象徴する柱時計の音と対照されて歌われていて、当時流行していたダダ的なスタイルとも通底している。

さらにさかのぼって、一九二五年七月号の『耕人』に発表された詩「街裏をさまよふ」は、「——夜更／街裏の下水のあたりを　さまよつた。」と始まっており、伊藤和が都市モダニズムの底辺にうごめくひとりの「黒き犯人」<sup>⑨</sup>でもあったことを物語っている。

伊藤には結婚前の一九一九年頃に「出奔して上京」（略年譜）した以外にも、数度の「出奔」があった。岡本潤は、彼が総武線の下総中山駅近くに住んで五十里幸太らとアナ系文芸誌『矛盾』を出していた一九二九年頃に伊藤が訪ねてきて、「これから東京へ行つて日雇労働でもしながら、アナキズム運動をするつもりだ」と言つたと記している。一九三四年には、上京して「土方」「人夫」のかたわら関東消費組合連盟の書記をしていたと「略年譜」にあり、「野口英子」（『詩行動』一九三五年四月）や「女との成りゆき話」（『詩行動』一九三五年六月）、「岡本の家にて」（『反対』一九三五年六月）といった運動や闘争を背景にしたばせた恋愛詩・心情詩がその頃書かれた。

もし「街裏をさまよふ」が、発表と同じ一九二五年頃の実体験をもとにした詩だとすれば、萩原恭次郎の『死刑宣告』（一九二五年十一月）が刊行されたのとほぼ同じ時期に、伊藤和にも都市の下水道のような裏町をさまよつた時間があったということになる。伊藤は、ほぼ四・五年おきに村からの「出奔」を繰り返していたのである。

都市と農村を往復する運動のなかからやがてアナキズム詩にたどり着いた詩人といえば萩原恭次郎はその代表格である。アヴァンギャルド詩人としての恭次郎は、もちろんきわめてユニークな存在であるが、しかし、アナキズム詩の生成・発展・消滅を考える上では、一つの基準線を

示している。前橋郊外の農村地帯——関東平野外縁部の養蚕業の盛んな農村地帯——から出たこと、都市と農村を往復するなかで思想と詩のスタイルを急速に発展させたこと、金融恐慌によって農村が壊滅的被害を受けた一九三〇年代には地元に住居してつぶさに農民の生活に触れたこと、そうした中でガリ版雑誌を自力で刊行したことなど——いずれも伊藤和と重なっている。

詩集『泥』所収の詩「町へ売る」は、そうした往還の視点がたくみに用いられた一編である。(全文)

頬かむりしてるからおやじずいぶん若く見える  
むすこが兵隊から帰れるといつて

この頃はすっかり元気が出たね

肩に天びん棒そしていっぱいにつまった肥桶をかついでいる

菜っぱや大根をうんとほきさせて置くのか

と、いつておれらが食うのではない町へ売る

大根が一本五厘、

菜っぱが一貫目五銭、

おれらはこんな相場で売っている

どうだい いい菜っぱと大根になつたなとおやじを

ほめたら

おやじふふんと笑つて 糞肥を五石もぶつ掛けましたヨという。<sup>16)</sup>

(\*ほきる：伸びる・成長する)

ここでの往還は、都市と農村ではない。もっと深く日常生活に組み込まれ、あらゆる農民たちが必要とする往還、換金のための「町」への往復である。「相場」は受給のバランスによって相対的に変動するが、農民たちの生活もまたそれにつられて変動する。町への行き帰りの頼りないバランスのうえにあやうく保たれている生活。ここには村と戦場との往

還——賭博に等しい命の行き帰り——さえ重ねられて、「おやじ」のつかの間の歓喜が表現されているのである。

伊藤和の第二期——「アナキズム詩」の多くには、こうした生産物の交換・流通に対する分析が内在化されている。その延長線上に、農村経済を司る行政機関や商店があつまる「町」の機能に対する批判があった。詩「本町通り」(『泥』所収)の、「商店は利益を増したくみに売り／銀行へ行き 出てくる／いかにも多忙だという風に彼ら前掛共」<sup>17)</sup>や、「米を売る話」(『弾道(第二次)』第二号、一九三三年十一月二十五日)の、「辛苦たれて俺らは自活のために労働し、取つた米にレットルを付けられ、めくらめつぼうに売る」<sup>18)</sup>といった言葉は、そうした分析と批判の現れであった。

#### 四 蜂起

詩「米を売る話」は、農村を支配する経済機構としての「資本主義」を批判し、「おれら」の「長い間の抱負」を奪い返すため、「労働者諸君」と手を結ぼうと呼びかけられている。詩にはつきりと現れている社会批判と、農村の現実を変革するための呼びかけは、伊藤和の思想と文学的実践がアナキズムの線に沿って一定の段階に達したことを物語っている。しかし、それは「アナキスト」としての思想と実践の表明なのであって、この詩にプロパガンダの性格がはつきりと表れていることもまた事実である。

一方、秋山清が「百姓の辛苦とかなしみがうつくしいまでリアルにうたわれている」と高く評価している「すいか」(『文学通信』第二号、一九三三年九月)では、真夏の畑に熟した「しるのしたゝる まつかなスイカ」を子どもたちに与えられない大人、もし手を出せばしからねばならない大人、の苦渋に焦点が合わされている。「くるまにつんで とほくのまちへ／



あせをながしてうりにゆく」という換金・交換の往復運動は、農村における「資本主義」の矛盾を象徴し、共同体の大人と子どもの親密さに小さな亀裂を生じさせるのである。

かつて『文芸戦線』に載った詩「吾子」で、「赤いしやつば」を買ってやれなかった父の無力感は、詩「すいか」にまでつながっている。その苦い諦めは、村の「おとな」全体の感情として共有され、「おららとみんなと わけてたべたい」という具体的な欲求へと結実する。「町」の飾り窓の帽子ではなく、みずから生産した「スイカ」を共有できないことの歯がゆさともどかしさは、何倍にも「おらら」に重くのしかかる。

ただし、ここに表された「町」の姿は、中世の「市」にまでつながる商品経済機構と同等にみえる。現実にはそれが近代的な産業／金融資本主義システムの一端を担うものであったとしても、「百姓」たちの往復運動は、前近代から営々と繰り返されてきた所作と何ら変わるところがない。農民の「長い間の抱負」を実現するために、原始的ともいえる蜂起Ⅱ一揆が集団的記憶の中から呼び起こされるのは、したがってゆえなきことではなかった。

早害がテーマの詩「部落二百人」(『文学通信』第四号、一九三三年十一月)では、最終連で、「おやじよ。そんならみんな商売人をなくさせろ！あの辛苦たれて穫った俺らの。今あらいざらい困りきつてる。まず俺らは米を奴らの倉庫から持って来て食え！」と歌われている。前掲の詩「天の災」同様、一揆のイメージが背後にあることはあきらかである。

「天の災」では、激情のほとばしりに近い言葉で「雨祈りの鐘が一揆の鐘になれ！」と歌われていた。しかし、「部落二百人」では、ふだんから米を売らねばならず、それで米の蓄えがないことを「早害と違いはしねえ」という認識が示され、「俺らが政府から米を買う。そんならあいつらはみんな商売人だ」と主張されている。

北総の詩人伊藤和はいかにして一揆の鐘を響かせたか

その上で詩は、「俺ら」に向かって、「まず……食え！」と命じている。理非曲直を詩人なりにわきまえたうえで、為すべき最初の行為として示されたのが「奴らの倉庫」の中の俺らの米を「食う」ことなのである。それは同時に、新たな主体・新たな共同体を出現させるための通過儀礼でもあった。

「部落二百人」では、日照りによる不作と、「町」による搾取は不可分に結合された複合的な矛盾Ⅱ災害として認識されている。「早害」が、天災と人災の複合的な現れであるならば、その危機こそが変革の契機となることを伊藤和は鋭く感知していたのである。

かかる地点に詩人が到達しえたのは、同じ北総地域の高神村でおこった農漁民蜂起に『馬』同人として関わった体験に拠るところが大きかった。

九十九里浜の北端、関東平野最東端の犬吠埼とその付近一帯は、一九三七年に銚子市に編入されるまでは高神村と呼ばれていた。農民、漁民、石切場で働く石工たちから成るこの村では、村内の漁港改築のために高い戸割税がかけられていた。そうした中で、村長山口藤兵衛が二万三千円もの村費を私的に流用していたことが発覚したのである。

旧盆さなかの九月六日の夜半、反村長派の指導者たちの呼びかけに呼応した村民二百五十名ほどが村長宅を襲撃する。そして群集は、指導グループの予定(村長宅を一部破壊し鐘の合図で速やかに退避する)を無視して、役場や駐在所、村長派議員宅などを次々と襲ったのである。<sup>20)</sup>

手拭いで顔を覆い、竹棒や石つぶてを手にして村の半数近い男女が参加したこの騒擾事件を、雑誌『馬』の同人たちは「一揆」と呼び、論評・ルポ・詩によって、当事者たちの声を代弁し、支持し、声援を送った。伊藤の「高神村事件のときの詩」(『馬』第四号、一九三〇年十月十五日)はその一つである。詩は、事件翌日の犯人搜索の様子から歌い始められる。

野原の芒のやうに騒ぐあいつ等はゲートル巻きサーベルをがちやつかせた

野菊がいちめに咲いたそんな処にさへ卓上電話が置かれ

受話器を通して××に犯人は間断なく報告された

ここでの主役は子供たちである。彼らが、「叩きこはされた役場や駐在所や山口藤兵衛の家を見に行き万歳を叫ぶと、それをサーベルが追い散らし、やがてトラックがやって来て彼らの父や兄たちを運び去る。

あとからあとから たくさん縛られて行く者の目がギロギロ光る

おとつさん！ 兄さん！

呼びかけは泣声になる 泣け！

部落の男はみんな犯人である

さあ みんな犯人だ縛つて行け<sup>21)</sup>

子供たちに視点を据えることによって、事件が過去の現象として捉えられるのではなく、共同体およびその次世代にとつて、どのように影響するかという未来の時間軸が引き込まれた。その上で、詩は「事件の断固たる精神」を子供たちが継承し、「われわれは幾度も信ずることについて行ふ！」と結ばれる。子供たちの姿は、それを歌う詩人自身を含む「われわれ」の主体変革への意志を映し出す鏡でもあったのである。

この詩を、「吾子」（一九二六年）と、「すいか」（一九三三年）のあいだに並べてみれば、よりはっきりするだろう。子に玩具を与えられないことを嘆く父のその無力感やそれを通して表現された労働のわびしさは、親子の情愛を自明視した上での、閉じられた家庭内問題としてしか表れていかなかった。一方、「すいか」では、スイカを売らねばならないすべての大人とその子供たちとの関係へと開かれ、みずから生産した作物をみずから消費できないことの「百姓」にとつては実存的でさえある不条理さが表現されていた。「部落二百人」でも示されていたように、「村」や

「部落」という単位で、まず食糧が確保され、生活が保障され、権力の不当な介入を受けない自主的・自立的な自治組織を創ること。そのためには、時として立ち上がり、「みんな犯人だ」と叫ぶ必要があることを「高神村事件」は教えたのである。

### おわりに

一九三一年二月、伊藤は不敬罪、治安維持法・出版法違反容疑で検挙され、七月に懲役二年（執行猶予四年）の判決を受けた<sup>22)</sup>。この保釈直後、伊藤は同人の一人鈴木勝に宛てて、「家庭から生ずる運動への困難は最も吾々を苦しめると思ふ。尚吾々がそふ云ふ恩愛の情からもっと強く大胆になり得なかつた結果です」と書き送っている。父との訣別を告げる詩「逆流」をはじめ、「米を売る話」「すいか」「部落二百人」はこの後に書かれた。農村の構造的な矛盾や不条理を描き、あらたな自治共同体を希求するアナキズム詩は、自然化された家庭的恩愛の情と訣別する過程——そこには都市と農村を往復する出奔・帰郷の運動が重なる——なくして書き得るものではなかつた。

秋山清は、「農村運動の経験と階級的自覚とは、たとえば高神村の百姓一揆を、それを直ちに彼自身の内部における同じ怒り、同じ反抗とすることができた。一揆参加者と同じ熱度に燃え上ることができたのである<sup>23)</sup>」と、「農村運動」を通して伊藤和の身体に高い感性性が準備されていたことを述べている。あえて付言すれば、こうした位置に伊藤が立ちえたのは、「農村運動」と不可分となつた一九二〇年代からの創作実践があつて、その創作行為そのものの中に「階級的自覚」にもつながる深い省察があつたからなのである。

雨乞いの祈りに象徴された「老いぼれ」（＝搾取に甘んじる百姓）との訣



別と、「事件の断固たる精神」（高神村事件のときの詩）の子供たちへの継承と。伊藤和の詩は、あらたな「百姓」主体の誕生をうながすかのよう、その決別と継承の現場に立ち会おうとする。高神村事件は、そのもつとも核心的な転機であった。

## 注

- ① 「北総」は、「南総」（上総）と対になって歴史的に長く使用されてきた旧下総国の別称。現在では九十九里一帯を「東総」と呼ぶことがある。
- ② 秋山清「伊藤和と「馬」事件など」「伊藤和詩集」（国文社、一九六〇年）一八五頁。『近代の漂泊』（現代思潮社、一九七〇年）に一部改訂増補し収録。その際、引用文中の「昭和六年、七年ごろ」は「昭和八年」と改められた。『秋山清著作集』第八卷（ぱる出版、二〇〇六年）に収録。
- ③ 岡本潤「伊藤和という詩人——農民のなかの反逆的詩魂」（『本の手帖』一九六八年九月）。
- ④ 渡辺新「農民詩人伊藤和の思想と行動」（『千葉史学』一九九二年五月）。
- ⑤ 寺島珠雄「伊藤和さんについて——六号活字の片隅から」（『衍書月刊』一九九八年三月）。
- ⑥ 伊藤信吉・秋山清編『プロレタリア詩雑誌総覧』（戦旗復刻版刊行会、一九八二年）による。但し同目録でも一、二、八号は未確認とされている。
- ⑦ 前掲、秋山清「伊藤和と「馬」事件など」「伊藤和詩集」一八九頁。
- ⑧ 村田裕和「詩誌『コスモス』検閲の研究——伊藤和「B 29の大音」削除から不掲載へ——上・下（『立命館文学』二〇一二年七月・十一月）および「翻刻 プランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書」I・II（同上）参照。
- ⑨ 前掲、寺島珠雄「伊藤和さんについて——六号活字の片隅から」。
- ⑩ 『伊藤和詩集』四八頁。
- ⑪ 同前、三三三頁。
- ⑫ 伊藤和「秋の手紙」（『太平洋詩人』一九二七年一月）および「金魚」（同、一九二七年二月）。

⑬ この後、一九二七年十一月には関東社会芸術家聯盟が創立された。しかし、一九二八年以降、分裂・解体・再集合が繰り返され、数多くの団体・雑誌が生まれては消えた。一九三三年八月に解放文化聯盟が結成されて、アナキズム文学の再統一が図られ、タブロイド判雑誌『文学通信』が刊行されたものの、無政府共産党事件を直接のきっかけとして一九三五年十月で終刊する。

- ⑭ 『赤と黒』創刊号（一九二三年一月）表紙の「宣言」の一節。
- ⑮ 前掲、岡本潤「伊藤和という詩人——農民のなかの反逆的詩魂」。
- ⑯ 『伊藤和詩集』八〇九頁。
- ⑰ 同前、三七頁。
- ⑱ 同前、七八頁。
- ⑲ 同前、八九頁。
- ⑳ 高神村事件については佐久間耕治『高神村一揆』上・下（甞書房、一九八〇年）を参照した。主要な働き手を中心に数百名が検挙・勾留され、村民の生活は大混乱に陥った。三十九名が有罪。大審院で指導グループの判決が確定したのは一九三三年のこと（指導者の一人寺井久四郎は重禁錮七ヶ月）。
- ㉑ 『高神村一揆』下巻、六三〇―六四頁。
- ㉒ なお「高神村事件のときの詩」は初出誌未見。ここでは、『伊藤和詩集』と照合の上、旧仮名遣いで引用されている松永伍一編『近代民衆の記録Ⅰ 農民』（新人物往来社、一九七二年）を参照した。
- ㉓ 松永伍一『日本農民詩史』中巻一（法政大学出版局、一九六八年）二二六―二二九頁。同人の田村栄は入営中であつたため軍法会議により禁固二年の実刑。
- ㉔ 一九三一年七月三十日付鈴木勝宛・伊藤和書簡。前掲『日本農民詩史』中巻一、二七一頁。
- ㉕ 前掲、秋山清「伊藤和と「馬」事件など」「伊藤和詩集」一八三―一八四頁。

北総の詩人伊藤和はいかにして一揆の鐘を響かせたか